

《第 461 回 (2019年3月14日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：6人 文書参加：1人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『深く、深く掘りすすめ!<ちきゅう> 世界にほこる地球深部探査船の秘密』 山本省三/著 くもん出版

今、私たちが立っている地面の下には何があるのだろうか？地球深部探査船<ちきゅう>は、そんなはるか昔からの人間の夢の実現に向け、地球内部を掘削し、調査・研究するために誕生した船です。3年前、高知新港で一般公開があったことを覚えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

今月の課題本では、地球深部探査の歴史から、<ちきゅう>が誕生した経緯、また、未来へ向けてどのような研究が進められているのかなど、子どもにも分かりやすい説明とイラストで紹介されています。第四章で取り上げられているのは、高知コアセンター。高知コアセンターは、掘削されたコア（海底下の岩盤や地層を細い柱のようくり抜いたもの）を研究用に保存している施設で、世界には、なんとアメリカとドイツと高知の3か所にしかありません。そのほかにも、掘削の仕組みや、様々な分野の技術者たちのアツい想いを知ることができ、専門的なテーマにも関わらず興味を広げていける内容でした。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

●物語はよく読むが、このような地質工学の本は普段読まないで、難しい本かもと不安になりながら読んだ。だが、説明は分かりやすく、知恵を絞って<ちきゅう>を作ったエピソードでは、科学者の志を感じ、胸が熱くなった。このまま科学が進んでいけば、マントルまで掘削することができるかも？と感じられる、希望にあふれた終わり方だった。

●自分の関心ある問題とは違っていただけ、興味をひかれた。技術畑の人たちが頑張っているのが分かり、それぞれの分野の研究が、未来の子どもに繋がっていると思った。カラーの絵が時々入っているのも、飽きさせない工夫である。理科を学ぶ小学生の副読本によいのではないか。子どもに手に取ってもらいたいと思う本だった。

●科学系の本が好きで、初めての分野を知ろうとするときは、子ども向けの本から入っていく。<ちきゅう>という船がなぜできたか、分かりやすく書かれていると思う。地面の下に目を向けるきっかけにもなる。高知コアセンターは、あんなにいいものがあるのに、注目しないのはもったいない。地質学は、やっている人が少ないが、地道な研究に目を向けてもらえると嬉しい。

●課題本を読んだとき、『日本沈没』を思い出した。映画のリメイク版には<ちきゅう>が出てくるから。図や写真はカラーで、ルビも多くて分かりやすい。けれど、簡単に書いているわけではない。高知コアセンターは、大学の付随施設と思っていたので、世界の研究者に向けて開かれているとは知らなかった。高知の子どもにもっと知ってほしい。

●授業では、地球の模型をカパッと開いて「ここがマントル」と習ったが、マントルを実際見たことのある人はいない。「こう決まっている」と教えるのではなく、「研究は進んでいて、今はこのように言われている」というふうに教えてほしい。研究資金不足や時間制限など、シビアなところもきちんと書いていたのがよかった。縛りがある中でも、工夫して、自慢の船を建造していくところが、大人の仕事だなと思った。

●テレビや新聞で知る<ちきゅう>の姿は、〇〇ができた！とか、上手くいった結果だけ。この本を読んで困難や失敗を多くの人の力で乗り越えてきたということを知った。光の当たる部分だけでなく、見えない部分、陰にある努力の積み重ねを見ることができてよかった。これから先の科学の発展が人類のためにも地球のためにも、よきものでありますように。

次回 4月11日(木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『アカネヒメ物語』 村山早紀/著 徳間書店